

たという気がします。

一方、私も文学史等を教えるとき、「現代児童文学」は五九年を出発の目安とすると話しますが、本当は戦後の「現代児童文学」的な状況が生まれたのはそれより前だと思える。少年少女向けの叢書類、特に翻訳叢書に關して継続的に調査した中で言えば、五〇年から五八年くらいの時期ですね。「岩波少年文庫」、講談社の「世界名作全集」の両方が発刊されたのが五〇年、その後五三年に創元社「世界少年少女文学全集」が出る。創作の長編だと、国分一太郎『鉄の町の少年』（新潮社）が五四年に出ていることの意味は大きいでしょう。そして幼年向けでは、「岩波の子どもの本」が五三年、『母の友』（福音館書店）創刊も同年で、『子どものとも』（福音館書店）創刊が五六年です。そして五八年の講談社「少年少女世界文学全集」が当時爆発的に売れたという。要するに五九年の「出発」以前に、児童書ないし児童文学状況は準備されていた。つまり、創作だけを特化させたような見方に対して、もうちょっと違う視点が必要という思いがあります。

さらに広げて言うならば、「子ども」だけを読者対象とするのを「児童文学」だと考えるかどうか、ですね。それ自体が、つまり明治のお伽噺から童話、児童文学……と「発達」してきて、そして近代から現代のいわば究極の姿として「子ども」だけを対象とする「児童文学」に至ると

いう考え方自体、ちょっと違うのではないかと。明治のお伽噺の時代に、巖谷小波は「子ども」だけを対象にしたものを考えた。それが大正期の童話でむしろ対象が拡散したり、童話・童謡の運動になったりして、戦後になってまた、もう一回特化したものが生まれた。けれど七〇年代には理論社の大長編シリーズとか、福音館の「日曜日文庫」が出てくる。となると、実は五〇年代後半から七〇年前後ぐらいまでのごくわずかな時期が、「現代児童文学」が成立・存在していた時期か、と。七〇年代から既に、変質し始めていたのではないかと思います。

では今後は、どうなるのか、という話になるのですけれど……。たとえば、「児童文学」というジャンルに、もう一度何か意味を見いだしていく、ということが可能ではないかとも思うのですね。まず幼年向けは別枠として残るだろう。それより上の読者層、すなわち小学校高学年以上向け、あるいはヤングアダルトといったあたりを、「一般文学」と分けて考えようとするに、そもそもどういう意味、価値があるかということ自体を、もう一度きちんと考えることが、必要なのではないでしょうか。

それと、翻訳の児童文学については、最近の学生はほぼ誰一人、ケストナーという名前も知らない。では新しい作品を読んでいるかというと、まあ、「ハリー・ポッター」シリーズ（静山社）は知っている。それで、ファンタ